

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2025 年(令和7年)

7月5日 第746号



PDF版

国立市中 1-15-1

TEL.042-572-5141

FAX.042-573-0480

国立市公民館

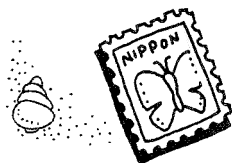
〈2025年1月25日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

間部 香代 著

『切手デザイナーの仕事 ～日本郵便 切手・葉書室より～』

— 取材から紡いだ8人8様の想い —

宮崎 彩乃



「切手デザイナー」という職業があることをご存じでしたか？

葉書や封筒の左上に貼る切手。通信の発達により、手紙を書くよりも、今はメールで送る、絵のスタンプ一つを送信するだけで、すぐに届くことが望まれるようになってきています。

そんな現代社会においても、変わらず人の手により、時間をかけて作り続けられている切手。そこにはまさに職人とも言える専門に携わる8名の切手デザイナーが、日本郵便の職員として活躍しています。切手のことを詳しく書いた本は、数多く出版されています。切手デザイナーに焦点をあてた本はない！ならば私が書く！と著者の間部さんは思い立ち、丁寧に取材を重ね、一人ずつ時間をかけてお話を伺い、書き上げた本がこの本です。

間部さんは、元コピーライターで、元雑貨店の店主で、子育てでもされて、今は児童書作家であり、大人向けの本も書いてしまう作家。自分の人生を5か年計画で決めているそうで、新しいことへ常に前向きに取り組み、自分の得意を活かし、上手に形にしている方です。

今回は切手のことと、8名の切手デザイナーのことを聞くことが出来ました。

なんと！会場には、本に登場する切手デザイナーが、間部さんが国立市で講演するからと来ていたのです。客席のすぐ手の届くところにお二人も！

切手には普通切手と特殊切手があり、年に約350種をたった8名でデザインしています。切手は2年越しで作るものですが、2011年東日本大震災後、すぐに寄附金付き切手を作ることとなり、わずか1週間でデザインしたのが、会場にいらした玉木明さん。ハート形の花びらや鳥の柔らかなデザインは、海外メディアからも注目を浴びたそ

う。玉木さんがこれまでデザインした切手は1000種類以上。切手デザインを「スプーン一杯のデザイン」と表現し、サムシング・ニュー、何か少し新しいことを常に取り入れている。

切手の「目打ち」(ミシン目状に空けた穴)、これがピタッときれいに同じ大きさ。これもデザイナーが切手の大きさに合わせて計算しているそうです。糊式切手だったのが、シール式切手の登場で、様々な形の切手が作れるようになったこと、切手を印刷できるのは5社のみで、日本では国立印刷局と凸版印刷、あとはフランスとオランダの会社である事など、未知の世界を知る機会となりました。

もうお一方、山田泰子さんは社内公募で唯一切手デザイナーになった方。もともとは京都の郵便配達員さん。水彩画が得意で、結婚式の招待状等に貼られる「ハッピーグリーディング」の切手デザイン等をされています。『青い鳥』をテーマにしたもの等、色彩がとても綺麗で優しい絵で癒されます。ダジャレもお好きで、日本郵便のホームページで、切手制作の裏側を紹介しているコーナー「切手タイムズ」の「レポーター郵子ちゃん」として、本領発揮されているのでぜひご覧になってください。

他の方々も、「ぼすくま」を生み出した方や、星座、鉄道、城、美術、美しい物シリーズ等々、様々な種類があり、年賀はがきやレターパックも、それらをそれぞれが制作

山田さんが「人の仕事には体温がある」と言い、玉木さんが「デジタルに勝つためには残ること」と言う。郵便料金は昨年30年ぶりに値上がりしましたが、差額分の切手のデザインもまた良いのです。まずは手紙を送ろう、そして休日には、東京の目白にある「切手の博物館」へ出かけてみようと思います。

(グラフィック社)

森鷗外著 『舞姫』 を読んで

田栗 陽子

5月8日に開催された「くにたちブッククラブ」の課題図書は、森鷗外著『舞姫』（新潮文庫）でした。

冒頭の「石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱灯の光の晴れがましきも徒なり。」はその格調高い文語文体であまりにも有名です。

「まるで詩のようだ。」と感想を述べられた出席者の方もありました。

学生時代、教科書で読んで以来という方、年月を経て、遠ざけていたものに興味を見出したり、若い時にはよく理解できなかった名著たる所以に気づいたり、今一度じっくりと再読してみたいと思う方も少なくなかったのでしょうか。講座室は、補助いすが出されての満杯の盛況でした。

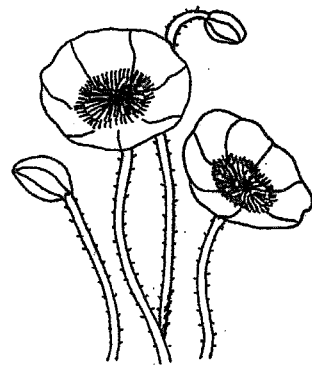
近代都市ベルリンを舞台に、念願の留学がかなって、日本の封建社会や「家」から解放された主人公豊太郎は、「舞姫」との愛の生活によって「所動的、器械的」な人間から、「まことの我」が「やうやう表にあらはれ」たのにもかかわらず、「我学問は荒みぬ」と立身出世の道を選び、愛する人と子を捨てて「東」へ帰って行きます。

ずっとエリートコースを生きてきた自分はどのようにするしかなかったけれども、「我脳裡に一点の彼を憎むころ今日までも残りけり」と、自分の中にもある男性中心主義、友人の相沢が勧めたような立身出世を「憎む」と終わっています。

表舞台の「公」的な華やかな活躍と、ささやかな愛に支えられた「私」的な裏舞台を行きつ戻りつする、豊太郎を通した揺れる思いは昔も今も変わらない、音楽のような雅文体にのって読者の心に染み入ります。

今回講師の山岸郁子さんから、今年度のテーマは「自分と『似ているもの』／『似ていないもの』」で、登場人物の中に自分と「似ている」ところと「似ていない」ところを見つけて読んでみるということも「文学」を読む醍醐味と伺ったのですが、男性からは、自分にも周囲に流され、決断できないところがあるという意見が、主に女性からは、豊太郎の男性中心的「弱き心」への批判の意見が多く見られました。

また、この小説で面白かったところという観点から、「実生活でも同じような場面に遭遇したことがある。妻



の懐妊の際、何の前触れもなくいきなり部屋にベビー用品が溢れていてびっくりした。」という発言もありました。私は、タイトルにもなったエリスのことを、ただ美しく貧しい無力な女性というわけではなく、自分と子どもを捨てて「東」へ帰って行こうとする夫に向かって、白いオムツをじゃんじゃん縫ってアピールする、強い意志を持った女性を感じました。

「くにたちブッククラブ」に初めて参加させていただきましたが、講座開始にあたり、講師の山岸さんの仰った「文学は実学です。」という言葉が胸に残りました。

仕事や家事を済ませた一日の終わりに、読書好きが集まって、一冊の本について語り合う場所があるとは何と豊かで贅沢なことでしょう。予定の時間が足りずに、山岸先生のお話が十分に伺えなかったことがとても残念でした。小説への読解のみならず新たな興味や想像が広がり、充実した時間を過ごすことができました。

(新潮文庫)

新着図書から

＜哲学 心理学 宗教＞

不登校クエスト

内田拓海 (飛鳥新社)

159

＜歴史＞

地名の古代史

谷川健一 (河出書房新社)

210

女性たちの韓国近現代史

崔誠姫 (慶應義塾大学出版会)

221

駅から登る日帰り山あるき (関東周辺)

中田真二 (実業之日本社)

291

＜社会科学＞

恐怖と自由 ヤン・ルヴェルナー・ミユラー (みすず書房)

309

戦時下の政治家は国民に何を語ったか 阪正康 (NHK出版)

312

選挙との対話

飯田健 (青弓社)

314

イスラエルとパレスチナ ヤコブ・ラブキン (岩波書店)

319

檻を壊すライオン

椋大樹 (かもがわ出版)

323

中高生から考える死刑制度

佐藤大介 (かもがわ出版)

326

姉と弟

藤原聡 (岩波書店)

326

刑務所に回復共同体をつくる

毛利真弓 (青土社)

326

異文化コミュニケーション入門 宮津多美子 (勁草書房)

361

SNS時代のメディアリテラシー 山脇岳志 (筑摩書房)

361

「キャリアデザイン」って、どういうこと?

武石恵美子 (岩波書店)

366

子どもをうまく愛せない親たち

橋本和明 (朝日新聞出版)

367

「ビッグイシュー」の社会学

八鍬加容子 (明石書店)

368

共立通2丁目のアーティストたち

畠中英明 (クリエイツかもがわ)

369

女たちがつくってきたお酒の歴史

マロリー・オメーラ (草思社)

383

季節を感じて日々を楽しむくらし歳時記

三浦康子 (成美堂出版)

386

従属の代償

布施祐仁 (講談社)

392

＜自然科学＞

優生保護法のグローバル史

豊田真穂 (人文書院)

498

＜産業＞

山里の生活実験

丸山啓史 (かもがわ出版)

611

大きなシステムと小さなファンタジー

影山知明 (クルミド出版)

611

「人は右、車は左」往来の日本史

近江俊秀 (朝日新聞出版)

682

＜芸術＞

額縁のなかの女たち

池上英洋 (NHK出版)

702

日本映画の「働き方改革」

深田晃司 (平凡社)

778

＜言語＞

ことばと公共性

牛窪隆太 (明石書店)

807

やさしい日本語ってなんだろう

岩田一成 (筑摩書房)

810

言語学者も知らない謎な日本語

石黒圭 (教育評論社)

814

＜文学＞

小さな名詩集

世界の名詩鑑賞会 (リベラル社)

908

海外児童文学をめぐる冒険

越高綾乃 (かもがわ出版)

909

クアーカーキーな女たちの伝統

小林富久子 (彩流社)

910

小さな詩歌集

世界の名詩鑑賞会 (リベラル社)

911

だめになった僕

井上荒野 (小学館)

911

藍を継ぐ海

伊与原新 (新潮社)

911

マイナーノートで

上野千鶴子 (NHK出版)

911

小鳥とリムジン

小川糸 (ポプラ社)

911

耳に棲むもの

小川洋子 (講談社)

911

坂の中のまち

中島京子 (文藝春秋)

911

架空犯

東野圭吾 (幻冬舎)

911

婚活マエストロ

宮島未奈 (文藝春秋)

911

傷ついた世界の歩き方

フランソワ・アンリ・デゼラブル (白水社)

95

くにたちブッククラブ

自分と「似ているもの / 「似ていないもの」

有吉佐和子『青い壺』(文春文庫)

講師 佐藤 泉
(青山学院大学・日本近代文学)

とき 7月10日 (木) 夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141

11月と12月の
日程が決まりました。11月13日(木)
12月11日(木)※12月は
夜7時～9時予定

▲ 講座詳細



※ 次回は9月11日(木) 織田作之助『夫婦善哉』(決定版) (新潮文庫) です。

図書室のついで

千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、
一度も海外に行ったことがないまま
ルーマニア語の小説家になった話

お話 済東 鉄腸 (映画ライター、作家)

ルーマニアと聞いてどのようなイメージを持ちますか？学校卒業後の引きこもり生活の中で済東さんはルーマニア映画に魅了されます。独学でルーマニア語を学び、後にルーマニア語で小説を書き始め、日本人では珍しいルーマニア語で作品を書く小説家として活躍。作品の数々は現地でも話題を呼んでいます。クローン病を患い、ルーマニアには一度も訪れたことのない済東さんですが、「今立っている場所でもやれることがある、その場所ですこ成し遂げられることがある」と言います。毎日の焦燥感の中からどのように自分のやれることを見つけていったのか、また、ルーマニアの言葉や、映画、小説の魅力や特徴についてもお話しいただきます。

〈済東さんの本〉表題作、『クソツタレな俺をマシにするための生活革命』(いずれも左右社)

とき 8月3日(日)

昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 7月11日(金)朝9時〜

電話またはホームページより申込

公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第4回〉

菅野裕子・恩田陸 著

『横浜の名建築をめぐる旅』

めぐる旅

美谷島邦子著、いせひでこ絵

『けんちゃんのもみの木』

田久保薫子



夏休みも目前となる7月がやってきました。少しまとまった時間ができたら、日常を離れ、一歩旅に出たくなります。今回は「旅」に関する書籍を2冊紹介します。

1冊目は横浜で生まれ育ち、横浜国立大学で教鞭を執る菅野裕子さんと建築好きの小説家、恩田陸さんによる『横浜の名建築をめぐる旅』です。みなとみらい、山下公園エリア、元町・山手を中心とした名建築の数々を美しい写真と解説で楽しめます。2人が2日間かけて横浜の街を共に歩き、建物鑑賞を楽しんだ様子も対談形式で巻末に記載されています。

「赤レンガ倉庫」にはじまり「旧横浜銀行本店別館」「ホテルニューグランド」「神奈川県立図書館・音楽堂」など、いつ見ても美しい建物の歴史やデザイン性の高い所以を本書で知りました。ちなみに複雑な形の組み合わせが楽しい外観の「外交官の家」は来客の目を喜ばせる工夫があちこちにされているそう。玄関ホールの階段は天井が高く、幾度も折れ曲がっているのもそのためとの紹介がされています。

菅野さんは「新鮮な空気の中で町を散歩するとうう、生の経験のかけがえのなさは、近年ますます切実に感じられるばかり。町を歩くことの喜びは、建築との出会いの中にもある」と言います。恩田さんは東京を「モザイク」、京都は「ミルフィーユ」、そして横浜を「ジュークボックス」と称します。「横浜自体が日本の近代の庭という感じがする。文明開化、海外への窓、突き進む時代、変わりゆく暮らし。その過程が場面ごとに綺麗に保存されていて、道ゆく人が時代を迫りながら鑑賞することができる」とコラムで語っています。国立からもふらりと訪れられる横浜に改めて足を運びたい気持ちが募ります。

2冊目は美谷島邦子さん(著)、いせひでこさん(絵)の『けんちゃんのもみの木』です。1985年8月12日、日航ジャンボ機御巣鷹山墜落事故が起きました。事故から35年、初めて一人旅に出た当時9歳だった息子との「さよならのない別れ」に長年苦しんだ母である美谷島さんが絵本作家のいせさんと5年に亘り、二人三脚で物語を紡ぎました。美しい絵は読み手を魅了し、祈りにも似た気持ちにさせます。空の安全を祈り、一人ひとりの尊き命に思いをはせる。読み継いでいくたい一冊です。

厳しい陽気が続きますが、本を友にこの夏も大切に過ごしていけたらと願う今日この頃です。『横浜の名建築をめぐる旅』(エクスナレッジ)・『けんちゃんのもみの木』(BL出版)

